

2020年度

# 俳句講座 句集 第1号

講師 倉科繁登先生  
(長野県俳人協会会長)

塩尻市中央公民館

# 目次

|         |     |       |    |
|---------|-----|-------|----|
| 薰風      | ……… | しほ    | 1  |
| 初日記     | ……… | 山崎 政子 | 3  |
| 寒晴れ     | ……… | 田中 覚重 | 5  |
| 福寿草     | ……… | 杉原 宮子 | 7  |
| 唐辛子     | ……… | 清水 勝子 | 9  |
| モルゲンロート | ……… | 中島 ゆき | 11 |
| 金魚の孤独   | ……… | 樋口 芦笛 | 13 |
| 甲州街道    | ……… | 和 美   | 15 |
| 故郷      | ……… | 内川 栄介 | 17 |
| 春を待つ    | ……… | 五条 さと | 19 |
| 冠雪      | ……… | 掛橋 庸子 | 21 |
| 灰色の月    | ……… | 檸檬 檬  | 23 |
| 安良居     | ……… | 山法師   | 25 |
| 猫の髭     | ……… | 長 泰裕  | 27 |
| 野分晴     | ……… | 赤津 勝広 | 29 |

# 薰風

その一

しほ

ポコポコと踊り出て来し露の臺

白牡丹咲きて空気の澄み渡る

薰風や橋完成の近付きし

銀漢や君は刑死を望みしと

客去りて空いっぱい  
の鱗雲

# 薫風

その二

しほ

冬どるる満蒙開拓記念館

雪白し穂高岳は昔活火山

星飛びて地に立ち上る霜柱

積もる雪雀群れ来て群れ去れり

ひだまりに今日も母居り手毬唄

# 初日記

その一

山崎政子

アマビエを暑中見舞ひに描きけり

コロナ禍の手洗ひの日々秋暑し

満月や双眼鏡で独り占め

収穫の大根の香よ土の香よ

豪快にほうり込みたるおでん鍋

# 初日記

その二

山崎政子

朝刊を運ぶ足音霜柱

雪女音を奪ひて飛び去りぬ

初日記楷書の並ぶ一ページ

靴を履く土手の芽吹きに会ひたくて

ごつき手の量る白魚百グラム

# 寒晴れ

その一

田中覚重

雛人形嫁ぎしあとも飾りけり

ウイルスに入学式が感染す

作付けの思ひ膨らむ牡丹雪

野も山も庭の膨らむ五月かな

畑手入れ入りてまた出る梅雨の空

# 寒晴れ

その二

田中覚重

秋暑し飛行機雲とすじ雲と

中天の真ん中占むる百日紅

玉葱の苗を求めて二店目へ

裸木の枝切る音の響きけり

寒晴れやあれが常念岳穂高岳

# 福寿草

その一

杉原宮子

孫入学ババの気持は祝金

コロナ案じ息子顔出す夏の昼

自粛して目の中にあるあやめかな

夫惚ぶほたる飛び交ふ田んぼ道

平凡に暮らす幸せ梅漬ける

# 福寿草

その二

杉原宮子

暑気払い雨が降っても乾杯す

真正面向く向日葵にはげまさる

空晴れて豊作喜こぶ雀かな

料理にはわき役まわりの葱の味

福寿草咲いて我家に幸が来る

# 唐辛子

その一

清水勝子

淡き罪重ねて牡丹くづれけり

晩夏光赫き翳持ち刻惜しむ

秋暑し雲奔放に裏返す

唐辛子時間を止めてしまひけり

霜柱柱の中の涛の音

# 唐辛子

その二

清水勝子

冬桜夕星ひとつ咲かせけり

枯草の長き時間を曳きてをり

裸木は己の影を頼りにす

寒鴉ことば一つを置き去りに

凍鳥の遠き時間を数へをり

モルゲンロート その一

中島ゆき

禅寺の蠟梅咲きて無言の行

寒行の太鼓の余韻今も尚

雪晒し消したき事の多かりき

鴉にも帰る家あり冬菫

もやもやのいつしか消ゆる冬の雷

モルゲンロート その二

中島ゆき

ものの芽のそれぞれ違ふ明日のあり

窓越のモルゲンロート名残り霜

寝つけぬ夜まぶたの裏のあやめ見ゆ

式部の実数多の恋のこぼれけり

赤々と主無き庭のななかまど

# 金魚の孤独

その一

樋口芦笛

木の芽吹く火止め三日の窓の息

入学や日差しに弾む靴の音

水替へて金魚の孤独ピアノ鳴る

弓道女子袴の襷の涼しかり

駅のホームの両端暗し天の川

# 金魚の孤独

その二

樋口芦笛

野鍛冶打つ火の粉の跳ねて牡丹の芽

白牡丹開きて母の七年忌

伊豆の浜より持ち来し石路の咲きにけり

凍滝は雲を目指して育ちをり

雲飛んで民話の里の草氷柱

# 甲州街道

その一

和美

追憶の龍の一文字父の凧

寒椿紅引くことを忘れけり

山の栗鼠せつせと木の実貯める頃

甲州街道走るアベベや遠き秋

吞まぬ人猿にも似たり紅葉狩

# 甲州街道

その二

和美

間を開けて食べるラーメン秋暑し

孫と焼くシュークリームや巴里祭

「もうケツコー」コロナを嘆く閑古鳥

やがてゆく西方浄土合歓の花

終息を祈るかたちに银杏散る

# 故郷

その一

内川栄介

縄文の紋様明し胡桃の実

葱洗ふ光の棒の耀ひぬ

草の芽の土塊を割り風を知る

雪積る松の密なる暗き闇

強霜や地上に虹の柱立て

# 故郷

その二

内川栄介

蟪蛄の威嚴の貌や宇宙人

彼の世へは船で渡ろう天の川

菖蒲園風のあらぶる蝶飛翔

稲滓火や故郷捨つることなかれ

かなかなや悲しみ捨つる森のあり

# 春を待つ

その一

五条さと

春を待つ地蔵の笠を直しけり

天の川還らぬ御霊照らしけり

栗むきて故郷想ふ一夜かな

水澄みて白き指よりこぼれをり

幼な子の星になりけり去年今年

# 春を待つ

その二

五条さと

春寒や炎を見つめ居座りぬ

流そられ星宇宙のかなたに未来あり

コスモスや大地に根づき天仰ぐ

傘になり滝になる雨のあやめかな

木苺の粒ひとつづつ願ひあり

# 冠雪

その一

掛橋庸子

車椅子孫が寄り添ふ慰霊の日

庭の草伸び放題の梅雨ごもり

塩むすび堅めに炊きて土用入り

避難所の夜の深さや秋暑し

迷い来て畳を歩く子かまきり

# 冠雪

その二

掛橋庸子

地底より放たれし矢霜柱

息吐けばこぼれる如し初冠雪

閉園を知らぬ冬日の山羊の声

雨上がりむくむく動く木の芽かな

丁寧になぞる文字や冬時間

# 灰色の月

その一

檸檬

雁風呂や別れの声もやはらかき

つなぐ手が寄り道わき道入学す

沖縄忌記憶の風化梅雨明けぬ

溪流に口をつければ雲の峰

香港の月灰色の「不協和音」

# 灰色の月

その二

檸檬

蝸螂や命を分けし空の青

十三夜夢に漕ぎ出すメコン川

少年の大志見詰むる楢明り

少年の声凛々と雪風卷

水底の賑はひ始む木の芽雨

# 安良居

その一

山法師

安良居や病乗り越え西病棟

カタカタと母踏むミシン春隣り

蟪蛄のコロナ禍に勝つ構へかな

かなかなやトトロの森で終活す

ステイホーム耳を澄ませば蟬の声

# 安良居

その二

山法師

認知症の母に尋ねる山法師

賄ひの祖母の味付け煮大根

蓼科山は借景の庭照紅葉

折り鶴を窓に飾りし凍てつく夜

バースデイ和菓子の中の照紅葉

# 猫の髭

その一

長 泰裕

無限なる空の深さや流し雛

あと十歩胸突坂の木の子風

ワカナチ  
若夏の平和の詩や時を止む

炎天の動かぬ風の重さかな

夏帽子ピースサインのはにかみぬ

# 猫の髭

その二

長 泰裕

かなかなの谷は暗きに沈みをり

猫の髭色なき風を読みりけり

小さき手としばし遊べり雪の片

泥葱の白き光を隠しをり

読み聞かす絵本おそろし雪月夜

# 野分晴

その一

赤津勝広

いぬふぐり小学生の吾と出会ふ

主なき雛の笑みや畳の香

ランドセル春いつぱいの重さかな

朝九時の内示北窓開きけり

蝉しぐれ対岸に建つ葬儀場

# 野分晴

その二

赤津勝広

新藁や家族写真の色褪する

蠅螂の目に映る吾の小さきかな

卓袱台の水拭きの筋野分晴

氷餅包む故郷の新聞紙

冬木の芽ひとつひとつに菩薩居り

おわりに

塩尻市中央公民館俳句講座の句集ができあがりしました。一年間の講座のまとめとして、初めての句集となります。

今年度は、コロナウィルの感染により六月の講座と、五月の自主教室が中止となり、講座は七月から全八回の開催でした。そのような中で、熱心に学ばれた受講生の皆さんの一年間の歩みとして、この句集が作られました。

本講座の講師、倉科繁登先生には一句一句について丁寧に指導いただきました。その成果がこの句集に集約されています。この場をお借りして感謝申し上げます。

この句集が、これからの句作の道しるべとなることを願っています。

令和 三年 三月

塩尻市中央公民館長

赤津勝広

俳句講座句集 (2020年度)

第1号

2021年3月31日 発行

塩尻市中央公民館